

有馬慶美(著)

「理学療法臨床診断学への志向— ARIMA の問題解決モデル」

嶋田智明

(神戸大学大学院保健学研究科)

Harden(1984)は、医学教育は暗記中心の教育から問題解決能力を重視する教育へと転換するべきとして、問題基盤型学習(problem-based learning:PBL)の重要性を強調した。一方、2008年に中教審答申が示した参考指針でも大学の学部教育(学士課程)でつけておくべき力、すなわち「学士力」として問題解決能力の重要性が取り上げられている。この問題解決能力は、臨床現場で理学療法士に不可欠なスキルであるため、理学療法士教育における重要な到達目標のひとつでもある。本書では、著者が独自に作成した問題解決モデルが提示され、これが理学療法診断における思考過程をサポートする準拠枠となっている。これは理学療法の対象者が有する問題解決のヒントとなる多くの情報を分類・整理し、その問題解決策を講じるための思考を円滑に導くものである。

理学療法士も医師と同様、治療に先立って問診、情報収集・検査・測定などを実施し、障害に関して推論・洞察が行われて、問題点、すなわち治療の根拠を得ることができるが、この問題解決の思考過程はまさに医師の行う診断プロセスと似ている。すなわち、理学療法診断学とは、理学療法士が妥当性のある理学療法を展開するための根拠を得るために、患者や障害者を取り巻く医学的、心理的、社会的側面から、患者や障害者個人を生活全体で総合評価し、リハビリテーション・ニーズに基づき問題点を明らかにする一連の

プロセスといえる(和島英明:理学療法のための臨床問題解決法,協同医書出版,1997)。

本書は、まさにこの問題解決プロセスの「手引書」であり、大きく5章から構成されている。第1章は、問題解決の思考モデルと理学療法診断、第2章は、理学療法診断のための問題解決モデル、第3章が問題解決モデルを用いた理学療法診断、第4章が疾患別の問題解決構造、そして第5章で理学療法診断の演習問題を取り上げている。なお、本書では理学療法診断をPBLの応用である症例基盤型学習(CBL)をツールとして学ぶ工夫がなされているのが大きな特徴であり、臨場感ある問題解決のプロセスが生き生きと学べる。また、臨床実習における思考をサポートする活用方法についても懇切丁寧に説明しており、臨床実習をひかえた理学療法学生諸君にとっては有用な「指南書」となるであろう。

著者の有馬慶美氏は、神戸大学大学院医学系研究科博士後期課程で、理学療法士の問題解決能力を高めるPBLの研究を通じ、学位を取得された優秀な理学療法士であり、理学療法士教育に情熱を持っていつも大きな課題にチャレンジされている、これからのわが国における理学療法界の「期待の星」でもある。

読者は、本書を通して理学療法の実践場面で遭遇する多くの運動・内部機能障害を分析し、さらにそれを解決に導くクリニカル・リーズニングスキルの開発・向上をめざすこともできる。本書が理学療法の臨床場面で直面する多くの問題解決に活用され、その系統的・論理的考察を進める上で広く活用されることを望んでやまない。

●B5判・154頁・2色刷

定価 3,780 円(本体 3,600 円+税)

2010 年 文光堂・刊